

C-43 半 衿 (第 2 報) 半衿の模様と表現技術  
共立女短大 綾田雅子

目的 現在、半衿には、花柳界、婚礼用等、極一部を除いてほとんど加飾が行われていない。しかし、明治、大正、昭和初期における半衿は、和服自体の地味さ、あるいは半衿そのものを広く見せる着装法により、様々な意匠が施され、着装上の調和における重要な位置を占めている。第1報では、時代を江戸時代に限定して半衿の起源と発達について報告したが、今回は半衿の全盛期を含む明治・大正・昭和(20年まで)の半衿の装飾性について考察した。

方法 東京国立博物館蔵の半衿及びその他一般家庭に現存する半衿の実物について年代・素材・模様・色・表現技術を調査し、整理分類した。更に、原色版写真印刷の文献資料を参考にして、小袖模様との比較を行い、類似性と差異を検討した。

結果 半衿の模様に関して、その取材は植物が最も多く、写生風な絵画的構図の出現率が高い。また最盛期である明治末期から大正初期には、謡曲や物語等、文学的抒情を表現した作品があり、単なる装飾としての模様の域を越えている。次に半衿における表現技法については、圧倒的に刺繍が多く用いられ、しかも小袖では多くの場合染のあしらいとして刺繍が使われたのに対し、半衿では刺繍だけで表現する、いわば刺繍の主体性を発揮した例が多い。狭い空間、近距離鑑賞という半衿の装飾条件のもとに、取材、構図、技術等に入念な工夫が凝らされ、表現効果を上げている。そこに半衿の装飾的独自性を認めることができた。